

不登校生徒一人一人の状況に応じた学びの実現 ～チャレンジクラス（不登校対応校内分教室）の取組について～

令和 7 年 2 月
東京都教育委員会

I 研究主題設定の理由

1 不登校生徒に対する支援の重要性

中学校学習指導要領において、「不登校生徒については、保護者や関係機関と連携を図り、心理や福祉の専門家の助言又は援助を得ながら、社会的自立を目指す観点から、個々の生徒の実態に応じた情報の提供その他の必要な支援を行うものとする」ことが示されている。【第1章第4の2の(3)のア】都内公立小・中学校における不登校児童・生徒数は増加傾向にあり、その要因や背景は複雑化・多様化している。学習指導要領や教育機会確保法の趣旨等を踏まえ、学びの継続や社会的自立に向け、一人一人の状況に応じて適切に支援していくことが重要である。

2 チャレンジクラス（不登校対応校内分教室）の設置

東京都教育委員会は、都内公立中学校等において、不登校生徒が安心して学校生活を送ることができるようなゆとりある生活時程を実現し、実態に応じた支援を行うため、「東京都公立小学校、中学校、義務教育学校及び中等教育学校前期課程の学級編制基準」（昭和45年教育委員会告示第13号）により、区市教育委員会が設置するチャレンジクラス（不登校対応校内分教室）に教員を配置するとともに、教室整備に係る費用を補助する事業を令和6年度から開始した。

以上を踏まえ、本研究では、チャレンジクラスが設置された10地区10校での取組を通して、不登校生徒一人一人の状況に応じた学びを実現するための支援や指導の工夫について研究を行った。

II 研究の視点及び研究仮説

1 研究の視点

本研究では、不登校生徒一人一人の状況に応じた学びを実現するための支援や指導の工夫として、次の3点に視点を当てて研究することとした。

- (1) 登校日数の増加のための取組
- (2) 学習内容の定着のための取組
- (3) 学校内外の機関等や教職員による相談・指導等を受けていない生徒の解消のための取組

2 研究仮説

不登校生徒と学校内外の機関等や教職員との関係を構築し、登校日数を増やすための支援や、学習内容を定着するための指導を行えば、生徒一人一人の状況に応じた学びを実現できるであろう。

III 研究の方法

1 実践研究

チャレンジクラスが設置された10地区10校において、研究の視点である(1)から(3)までの取組を計画し、実践した。その中から各校1実践ずつ、支援及び指導例として本資料に掲載した。

2 研究成果の検証

- (1) 登校日数の増加のための取組については、生徒の出席状況を前年度と比較しながら分析した。
- (2) 学習内容の定着のための取組については、生徒の様子や学習状況の変容等を記録した。
- (3) 学校内外の機関等や教職員による相談・指導等を受けていない生徒の解消のための取組については、設置校全体の不登校生徒の状況を確認した。

IV 各校の実践

1 登校日数の増加のための取組

- (1) 墨田区立桜堤中学校チャレンジクラス～休んでもクラスとつながるデジタル活用～
自分の考えを伝えることに苦手意識のある生徒が多かった。また、チャレンジクラスへの入級後もなかなか登校できない生徒がいた。

そこで、登校できない生徒と学習支援アプリでやり取りをし、他の生徒たちの昼休みの様子などを配信することで、「自分も登校して一緒に学校生活を送ることができるかもしれない」という気持ちを引き出すことができた。また、スクールカウンセラー（以下、「SC」と表記）が関わり、相談しやすい体制を整えた。その結果、「授業中に指名してほしくない」などの生徒の本音を聞き、生徒の心理的負担を減らす配慮をすることで、登校しやすい雰囲気をつくった。



授業にリモート参加する生徒へ言葉掛け

- (2) 日野市立三沢中学校チャレンジクラス～登校スケジュールや1日の過ごし方を自己決定～
在籍生徒の令和5年度の平均出席率は24.8%で、年度当初は、家から出られず家庭訪問しても会うことが困難な生徒が複数いた。

そこで、自分のペースで登校できるよう、教育相談、家庭訪問などの登校支援を行った。また、登校スケジュールや1日の過ごし方などを、登校時に生徒自身が考えるようにした（出席カード）。学習への抵抗感が強い生徒には、個別スペースの使用を提案したり、授業の主担当以外の教員（T2）による個別対応を行ったりした。

その結果、令和6年12月末時点で、平均出席率は32.9%に増加し、13人中8人の生徒が前年度1年間の出席日数を超えた。また、前年度全く登校できなかった生徒が登校し始めた。

7 出席カード	
月 日 () 天気 ()	年 通 第 ()
今日の登校した時間	時 分
下校する予定時刻	時 分 (帰国後の通 / 部活後 / 下校)
① 授業態度	
今日の授業	元気、まあまあ元気、頑張る、頑張る
その他	()
休憩時間	元気、少し元気、少し元気、少し元気、少し元気
食事	元気、少し元気、少し元気、少し元気、少し元気
今日の気分は？ (1から5まで)	() () () () ()
② 今日の学習態度を振り返る	
課題	どう感じた？ (課題のやりかたや内容について振り返る)
1	元気、元気、元気、元気、元気
2	元気、元気、元気、元気、元気
3	元気、元気、元気、元気、元気
4	元気、元気、元気、元気、元気
5	元気、元気、元気、元気、元気
6	元気、元気、元気、元気、元気

出席カード

- (3) あきる野市立秋多中学校チャレンジクラス～心と生活リズムを整える環境づくり～
前年度は、心身の不調などの理由により欠席する生徒が多かった。

そこで、ゆとりある生活時程を設定する中で、心を整えるための工夫を行った。例えば、生徒がリラックスできるよう、教室内で落ち着いた雰囲気 of BGMを流した。また、生活リズムや心身の状況の把握のため、担任と生徒が休日の過ごし方や出来事などについて互いに話し合うなど、コミュニケーションを楽しむ時間を設定した。

その結果、「大人数が苦手」、「自分のペースでゆっくり学びたい」といった生徒にとって、チャレンジクラスは登校しやすい場所になり、平均出席率は、前年度の25.2%から令和6年12月末時点で42.4%に増加した。



コミュニケーションを楽しむ時間

2 学習内容の定着のための取組

- (1) 江戸川区立篠崎中学校チャレンジクラス～習熟度別自由進度学習やオンライン授業配信の導入～
多くの生徒が基礎的・基本的な学力の定着に課題が見られ、学年を遡って学習を積み上げる支援の必要があった。

そこで、一人一人の学習の定着度合いを分析し、個別の学習計画を立て、個に応じた学習プリントに取り組む習熟度別自由進度学習を実施した。また、希望する生徒には、一人1台端末を活用して、双方型でオンライン授業の配信をし、学習保障に努めた。

その結果、「分かった」、「できた」といった実感が積み重なり、学習への苦手意識が減少した。



同じ教室内でも、個に応じた方法で学ぶ

(2) 中野区立中野中学校チャレンジクラス～アセスメントに基づく個に応じた授業の開始～

不登校になった時期の違いにより、同学年内でも学習内容の定着状況に差があった。

そこで、チャレンジクラスへの入級後に、教科担任が生徒一人一人の学習状況について、生徒と面談しながらアセスメントし、一人一人に応じた授業を実施することにした。また、定期考査の2週間前、夏季休業中の2週間、補充学習を行い、一人一人の習熟状況に合わせた学習に取り組み、定期考査も個に応じた内容で作成した。

その結果、生徒は、学習への苦手意識が少なくなり、定期考査後に学力が身に付いた実感と学習する達成感を味わうことができた。



定期考査前の補習授業

(3) 小平市立上水中学校チャレンジクラス～定期考査に向けた伴走型の学習支援～

学習への意欲は高いが、学び直しが必要な生徒も一定数いる。

そこで、補習プリントを配布したり補習授業を行ったりして、過去の出席状況や学習の定着度による学習面の差異を減らしていくよう配慮した。また、定期考査前には出題範囲を確認し、生徒と教師が共に学習計画を立てて授業を行った。

その結果、2学期の中間考査では、昨年度末の定期考査で1教科も受験できなかった生徒が複数教科を受験でき、中には全教科を受験することができた生徒もいた。



理科の静電気の実験

3 学校内外の機関等や教職員による相談・指導等を受けていない生徒の解消のための取組

(1) 杉並区立高井戸中学校チャレンジクラス～教育支援センターや特別支援教室との連携～

チャレンジクラスに入級したものの、再び登校できなくなってしまったり、人間関係に不安を覚えたりする生徒がいた。

そこで、校内委員会での検討を踏まえ、当該生徒が安心できる居場所である教育支援センターとの併用を視野に入れ、チャレンジクラスの教員が教育支援センターに出向き、効果的な支援や連携について共有した。また、特別支援教室の拠点校である長所を生かし、月に2回、SSTなどの活動を巡回指導教員と連携して実施した。

その結果、年度途中から入級した生徒も含め、チャレンジクラスの生徒同士の交流が深まった。



SST（ソーシャルスキルトレーニング）

(2) 武蔵村山市立第三中学校チャレンジクラス～「チーム学校」による支援の推進～

チャレンジクラスや他の通常の学級において、困難な家庭環境の中で不登校になっている生徒がいたものの、どのように支援すればよいか悩む場合があった。

そこで、チャレンジクラスの教員やスクールソーシャルワーカー（以下、「SSW」と表記）、SCを含む教育支援会議を毎週開催し、不登校生徒への支援を「チーム学校」として行った。また、不登校対応フローチャート及びSSW活用の手引きを作成し、校内で不登校生徒への支援の仕方を統一した。

その結果、学校内外の機関等や教職員による相談・指導等を受けていない生徒の人数を0人にすることができた。



教育支援会議（各学年担当、管理職、養護教諭、SC、SSW、不登校・特別支援コーディネーター参加）

4 自校で工夫したその他の取組

(1) 渋谷区立笹塚中学校チャレンジクラス～不登校生徒の保護者に寄り添う企画の実施～

不登校について誰にも相談できない保護者が多かった。

そこで、不登校支援団体の代表を講師として招へいした講演会を実施するとともに、保護者と教員による茶話会を2か月に1回程度実施して、保護者が家庭内の悩みや失敗談、子供へのアプローチの仕方などについて語り合えるようにした。

その結果、保護者同士や教員との関係構築につながった。また、保護者が来校できない場合にも、SSWと連携して教員が家庭訪問するなどして、つながりを保つことができた。



チャレンジクラスの保護者向け講演会

(2) 多摩市立東愛宕中学校チャレンジクラス～仲間との協働的な体験活動の充実～

不登校などのため、仲間との体験的な学習の経験があまりない生徒が多かった。

そこで、東愛宕中学校で育てている「ミツバチ」の生態を学ぶ授業を通して、チャレンジクラスの仲間と共に集めた「はちみつ」を瓶詰めして地域住民に配るとともに、「はちみつレモン」を作って試食するような体験的な学習を多く実施した。

その結果、仲間とのコミュニケーションが増え、学校生活が充実したことで、多くの生徒が継続して登校できるようになった。



養蜂活動で集めたはちみつの瓶詰め

V 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 登校日数の増加のための取組の結果、令和6年12月末時点で、チャレンジクラスの全生徒の平均出席率は53.8%（令和5年度37.7%）となり、約7割（70.1%）の生徒が、前年度1年間の平均出席率を上回った。（※ 平均出席率は、校長が指導要録上の出席扱いとした日数を含めずに算出している。）
- (2) 不登校生徒を関係機関等につなぐ取組の結果、学校内外の機関等や教職員による相談・指導等を受けていない生徒の人数は、10校のチャレンジクラス設置校全てで0人となった。

2 課題及び今後に向けて

- (1) 生徒一人一人の興味・関心をより一層引き出す指導計画の立案・実施等を進めていくとともに、チャレンジクラスの生徒の評価・評定をどのように工夫して、適切に行っていくかが課題である。
- (2) 10校のチャレンジクラスに在籍する生徒は、令和6年度当初は合計84人だったが、令和6年12月末時点で合計117人になった。今後、チャレンジクラスに在籍する生徒が増加していく中で、一人一人の状況に応じた支援の充実を図ることについて、研究を継続していきたい。

委員名簿

江戸川区立篠崎中学校	校 長	紅 林 兼一	小平市立上水中学校	主幹教諭	山 福 義 明
墨田区立桜堤中学校	主任教諭	黒 田 俊一	日野市立三沢中学校	教 諭	島 田 航 太
渋谷区立笹塚中学校	教 諭	根 岸 亮 太	武蔵村山市立第三中学校	教 諭	桜 井 優
中野区立中野中学校	教 諭	菅 家 正 晴	多摩市立東愛宕中学校	主任教諭	渡 部 和 香 子
杉並区立高井戸中学校	主任教諭	鈴 木 明	あきる野市立秋多中学校	主任教諭	高 橋 弘 義
江戸川区立篠崎中学校	主任養護教諭	蓮 見 愛			

担当 教育庁指導部指導企画課 統括指導主事 佐藤 誠、指導主事 古川 裕平